

「安森洞そうめん流し」と「節安ふれあいの森」の施設周辺には、現在住民は住んでおらず、また、「安森洞そうめん流し」は6月下旬から8月末の期間、「節安ふれあいの森」は、5月のゴールデンウィークと7月中旬から8月末の期間しか営業していない。

期間限定の営業であることからすると、例外的に補助事業に採択されることは困難であり、また、携帯電話事業者も、事業の採算性の点から参画しない可能性が非常に大きいのではないかと考える。

いずれにしても、二つの施設とも営業期間中は、万が一の事態の際には連絡が取れるように、公衆電話を設置しており、町としては、補助事業の採択の可否にかかわらず、現在のところ、他の事業に優先して実施することは困難ではないかと考えている。

◆横山 二郎 議員

【小学校の労働取組みについて】

問 三島小・泉小の取組みの展開について

答 三島小学校では、県の環境教育指定校となり、平成24年度、25年度の2カ年間に環境教育推進事業を実施することになっており、「ふるさとの自然を愛し、進んで関わろうとする児童の育成」をテーマに、地域の特産品であるユズについて学習していこうというものである。

次に、泉小学校では平成5年頃から元果樹試験場鬼北分場や鬼北農業指導

班の指導を受け、ブドウづくりに取り組んでいる。剪定、芽かき、ジベレリン処理などの管理作業を、鬼北農業指導班の指導を受け年間6回実施しており、身近なところで農業体験をすることができている。

秋には児童が中心となり、関係者を招いてブドウの収穫感謝祭を行い、ブドウづくりの1年を振り返るとともに、ブドウを観察して驚いたことや、管理作業で難しかったこと、楽しかったことなどを感想文にして、指導者の方などに感謝の気持ちを伝えている。

問 JA他、いろいろな地元企業を通じて、地域から学ぶことについて

答 三島小学校の事業の実施計画では、JAや町内のユズ加工業者を見学することになっている。また、ユズ農家の方や鬼北農業指導班の協力も必要となってくる。泉小学校についても、地域の農業関係機関の協力のもとで20年近くブドウづくりに取り組んできている。

問 腐葉土づくりから、これを利用して花・野菜づくりへの循環処理過程について

答 現在のところ三島小学校、泉小学校では、腐葉土をつくって花づくりや野菜づくりをするような計画はない。なお、ユズの搾汁残渣の処理については、日吉地区にあるJAのユズ堆肥センターで、オガクズや「えひめA I-1」を混入し、堆肥化してユズ畑等に還元している。

【地元学校図書館の現状、施策などについて】

問 蔵書数の実状について

答 鬼北町の小学校の学校図書館図書標準の定める冊数に対する蔵書冊数の率は、平成23年度末現在で、好藤が111.0割、愛治が94.0割、三島が116.9割、泉が104.2割、近永が88.9割、日吉が113.1割である。中学校は、広見が81.0割、日吉が116.1割である。

問 「学校図書館整備5カ年計画」による当町の変化について

答 当町においては、小学校2校と中学校1校が図書標準を達成していないので、早い時期に達成するよう努めていきたいと考えている。

問 図書館担当職員の配置について

答 現在、当町には「学校司書」は配置していない。

平成24年度から国において、公立小中学校に「学校司書」を配置するための経費として、単年度国ベースで約150億円の地方財政措置を行うこととしている。交付税上の地方財政措置が行われたわけではあるが、使途を特定しない、いわゆる一般財源として算入するということであり、本町のような財政基盤の脆弱な自治体では「学校司書」配置の経費として充てることは難しいのが現状である。

なお、学校図書館を活用した取組み

の中心となる司書教諭については、愛媛県では標準学級で7学級以上の学校に配置されることになっており、鬼北町では近永小学校、泉小学校、日吉小学校および広見中学校に配置している。

【前回「この21世紀を武左衛門の心で生きよう」の答弁不統一改善について】

問 日吉の先輩たちに学ぼうという方向が最後まで出なかったのはなぜか

答 武左衛門一揆については、この地域で先人たちによって起こされた大きな出来事であり、後世に伝えていかなければならない大切な歴史だと思っている。今後も武左衛門一揆記念館の活用や武左衛門一揆を伝える行事などを通して、武左衛門の偉業やその精神を次の世代に伝えていきたい。

問 課題に対し、事柄を明確にしていることとする構えの不足について

答 行政の役割の一部として、地域歴史を大切にしたり、またその歴史を研究することを側面的に支援することはあるかと思うが、特定の分野の研究活動そのものについては、やはり研究者の手に委ねるべきではないかと思っ

ている。

我が郷土の偉人として、そしてまた歴史上の大きな出来事として後世に伝えていけるよう、町としても引き続き取り組んでいきたいと考えている。